

2019.09.01 第1主日愛老聖餐礼拝

ルカ 2:25-38 「円熟を目指して」

聖書

- 25 そのとき、エルサレムにシメオンという人がいた。この人は正しい、敬虔な人で、イスラエルが慰められるのを待ち望んでいた。また、聖霊が彼の上におられた。
- 26 そして、主のキリストを見るまでは決して死を見ることはない、聖霊によって告げられていた。
- 27 シメオンが御霊に導かれて宮に入ると、律法の慣習を守るために、両親が幼子イエスを連れて入って来た。
- 28 シメオンは幼子を腕に抱き、神をほめたたえて言った。
- 29 「主よ。今こそあなたは、おことばどおり、しもべを安らかに去らせてくださいます。
- 30 私の目があなたの御救いを見たからです。
- 31 あなたが万民の前に備えられた救いを。
- 32 異邦人を照らす啓示の光、御民イスラエルの栄光を。」
- 33 父と母は、幼子について語られる様々なことに驚いた。
- 34 シメオンは両親を祝福し、母マリアに言った。「ご覧なさい。この子は、イスラエルの多くの人が倒れたり立ち上がったたりするために定められ、また、人々の反対にあうしるしとして定められています。
- 35 あなた自身の心さえも、剣が刺し貫くことになります。それは多くの人の心のうちの思いが、あらわになるためです。」
- 36 また、アシェル族のペヌエルの娘で、アンナという女預言者がいた。この人は非常に年をとっていた。処女の時代の後、七年間夫とともに暮らしたが、
- 37 やもめとなり、八十四歳になっていた。彼女は宮を離れず、断食と祈りをもって、夜も昼も神に仕えていた。

38 ちょうどそのとき彼女も近寄って来て、神に感謝をささげ、エルサレムの贖いを待ち望んでいたすべての人に、この幼子のことを語った。

はじめに

9月16日は敬老の日。教会でも毎年、敬老の意を込めて「愛老礼拝」としてご高齢の方々の祝福をお祈りさせて頂いています。愛老には2つの意味を込めています。一つは老いを重ねることを愛するという意味です。ただしこれは、年齢を重ねることで様々な課題が表面化してきますので、老いを愛することは口で語るほどには簡単ではありません。ですが、年齢を重ねること自体が神さまの祝福でもありますので、いのちを与えられ生かされていることを喜べるような者にされたいです。もう一つはご高齢の方々をキリストの愛をもって愛するという、支える側の意識を問う意味があります。ご高齢者に感謝と敬意をもって接するためにはキリストの愛が不可欠であることを覚えることができれば幸いです。

今朝の愛老礼拝は、キリストの誕生に遭遇したシメオンとアンナという2人の人物に目を留めます。クリスマスの時期に取り上げられることが多い箇所ですが、今日は視点を変えて老いの中に見る希望を見出したいと願っています。

1. シメオンと老い

まず、シメオンという人物に目を留めましょう。彼は聖霊から「主のキリストを見るまでは決して死を見ることはない」（26節）とお告げを受けていました。シメオンが宮に上ったとき、ちょうどそこにイエスさまが8日目の割礼（ユダヤ人の儀式の一つ）を受けるために両親に抱かれてやって来られました。その時のシメオンの様子をこう記しています。「シメオンは幼子を腕に抱き、神をほめたたえて言った。『主よ。今こそあなたは、おことばどおり、しもべを安らかに去らせてくださいます。私の目があなたの御救いを見たからです。』」（ルカ2:28-30）。

このみことばの中にある「安らかに去らせてくださいます」ということば

が心に留まりました。人は誰もが安らかな人生の締め括りを願うのではないのでしょうか。先月召されたH姉はその日の朝ごはんを食べて、その後2時間ほどのうちに静かに眠るように天に召されました。ご家族によると、少し前に体調を崩しておられたそうですが、長く伏せることもなく、また苦しまずに召されたことに感謝しておられました。もちろん、誰もがそのような終わり方を迎えることができるとは限りませんが、少なくとも平安な終わりを願う気持ちはすべての人に共通のものだと思います。

この時のシメオンの平安はどこから来たのでしょうか。その理由は「私の目があなたの御救いを見た」(30 節) ことにあります。幼子イエスさまの中に、この方は世の救い主としてお生まれになった方であることを見たのです。それは聖霊なる神さまが示してくださったことであり、シメオンがいつも聖霊の御声に従っていたゆえでもあります。シメオンは聖霊の示しにより、幼子イエスさまの生涯の目的を母マリアに、「この子は…人々の反対にあうしるしとして定められている。」(34 節) と語り、十字架の道を預言しました。十字架によって罪の赦しが完成することを思うとき、シメオンが神さまの救いのご計画である幼子イエスさまの誕生の場面に遭遇できたことは何にも代えがたい喜びだったのです。その喜びに深く感じ入って、魂の平安を得たのです。

今日私たちもシメオンが持った魂の平安を得ることができます。それは、イエスさまが与えてくださる救いの平安です。人が平安であるためには、肉体が健康であるだけではなく、精神(心)も健康でなければなりません。さらに人間関係も健康でなければならぬのです。肉体と精神と社会(人間関係)の3つが健康であってはじめて健康と言うと、WHO(世界保健機関)が定義しているように、どこかが不健康だと平安を保つことが困難になります。人間が不健康に陥ってしまう原因は、私たちが持っている罪にあるのです。この人間の罪を解決するために、イエスさまは地上に人の子となってお生まれになったわけで、シメオンはそれを今見ることができ、喜びの中で人生を全うしたのです。そのイエスさまは私たちの罪の解決のために十字架にかかってくださり、信仰をもってそれを受け入れる者に罪の赦しの恵みを注

いでくださいます。自分の過去の罪が赦されていることの平安が人を健康にし、結果安らかな地上の終わりへと導いてくださるのです。

2 アンナと老い

もう一人の人物はアンナという女性です。彼女は女預言者で「宮を離れず、断食と祈りをもって、夜も昼も神に仕えていた。」(37 節) 人です。年齢は 84 歳と書かれています。これはちょうど日本人の平均寿命と一致します。2018 年の時点で女性は 87.32 歳、男子は 81.25 歳で、平均は 84.29 歳です。彼女もまたシメオンと同様に、宮を中心とした生活を送っていました。シメオンやアンナに見る神さまを中心とした生き方は、今で言うなら教会を中心とした生活ということができます。日本社会の中ではクリスチャンは超少数派です。私たちはみなそれぞれの場所で生活しています。その間、いろいろなことがあり、不安や恐れに囲まれることもあるでしょう。しかし、それを分かち合う場がないために不安定になってしまいます。それが週に一回ですが、教会に集まり同じ信仰を持っている方々と礼拝をささげるとき、礼拝の中で一体感が生まれ、互いに励まし合うことができます。教会を中心とした生活、すなわち礼拝を中心とした生活はクリスチャンの健康のために不可欠であることをぜひ覚えていただきたいです。礼拝を大切にし、礼拝の場を慕うお互いでありたいと願います。

84 歳のアンナは礼拝の場である宮で幼子イエスさまにお会いしました。彼女の特色は「エルサレムの贖いを待ち望んでいたすべての人に、この幼子のことを語った。」(38 節) ところにあります。自分が幼子イエスさまに会って慰められただけでなく、救いを待ち望んでいる人々に希望を伝えたのです。自分のためだけでなく、人のために生きること生き甲斐を得ることができます。何歳になっても誰かのために生きingことを目標にしている人は強いです。活動できる範囲や形態は年齢とともに変わって行きますが、社会から離れて閉じこもってしまうことは危険です。そうではなくて、自分にできる範囲と形で常に社会に関わり、自分の存在が人々の役に立っていることを自覚できるなら、そこに生き甲斐を見出せるのではないのでしょうか。それは病氣

になっても障がいを負っても同じで、どんな人にもどんな状況にあっても、人のために生きる道は最後まで残されています。よく言われますように、祈りの奉仕は最後まで残されています。合わせる手があるなら、一日中ベッドに横たわるようになって、最も崇高な奉仕である祈りに専念することができます。それはどんなに素晴らしいことでしょうか。牧師として病者を訪問することがありますが、病めるご本人が私のために祈ってくださるとき、とても感動します。私自身が励まされて帰って来ることがしばしばあり、祈りの力の大きさを改めて思われています。もし手を合わせることさえできなくなっても、心の中で祈ることはできます。いや、もっと言えば、そこに一人の人（信仰者）が生きていること自体がキリストの証なのですから、最後までキリストの証人として、人々に救い主であるイエスさまを届けて行きたいと思います。「自分には最後まで使命がある」と信じて生きる老後を描くことができるようにお祈りします。

3. 平和の祈り

シメオンに見る魂の平安を得て人生を締め括る幸い。アンナに見る人のために生きて人生を締め括る幸い。ご高齢の方々がこのような生き方を求めているだけをお願いしつつ、それを愛をもって支える周りの人の存在も大切に思います。人が生きていることは尊いことです。ですから、自分が人のお世話になる時が来ても、自分はダメな人間になってしまったと思わないようにしてください。人の手を借りることに申し訳なさを感じるかもしれませんが、自分で自分の価値を貶める必要はありません。また、支える側に立つ人も、ご高齢のゆえに何かができなくなっても、だからと言ってその人の価値を貶めるような言動は厳しく戒めなければならないと思います。一人の人の存在を神さまが与えたいのちとして尊び、世界でたった一つの命なのですから、尊厳をもって接することができるようにされたいと願います。

人には最後まで使命が与えられていることをアッシジのフランチェスコの「平和の祈り」に見ることができますので、それを紹介して締め括ります。

ああ主よ、わたしをあなたの平和の道具にしてください。
憎しみのあるところに、愛をもたらすことができますように。
争いのあるところにゆるしを、
分裂のあるところに一致を、
疑いのあるところに信仰を、
誤りのあるところに真理を、
絶望のあるところに希望を、
悲しみのあるところに喜びを、
闇のあるところに光をもたらすことができますように。
ああ主よ、わたしに、
慰められるよりも、慰めることを、
理解されるよりも、理解することを、
愛されるよりも、愛することを求めさせてください。
わたしたちは与えるので受け、
ゆるすのでゆるされ、
自分自身を捨てることによって、永遠の命に生きるからです。

アーメン

この祈りを私たちの祈りに代え、最後の最後まで神と人のために生きる者とされたく願います。

結び

老いて、この祈りのような生活に至るなら、それこそ今朝の説教題である円熟の境地と言えるのではないのでしょうか。シメオンやアンナに円熟した人生を見たように、私たちも円熟を目指して歩もうではありませんか。罪の赦しのためにキリストの十字架を仰ぎ、主に赦されたところの愛をもって人々を愛し、人のために生きる喜びを感じながら、人生の締め括りへと向かわせていただきましょう。またそのようなことを分かち合える場所として教会が開かれていくことを願います。